

## 編集後記

今月は1編の原著と16編の症例報告、1編の臨床経験と1編の研究速報である。相変わらず、症例報告が多いが、いずれもタイトルを見れば、思わず読んでみたくなる興味ある論文であり、編集委員のひとりとして誇りに思う。特に坂本論文は、元は症例報告として投稿されたが編集委員よりぜひ原著形式で、と推薦され、再投稿の結果、受理されたものである。内容は胃切除後に発生した胆管結石症に対して腹腔鏡下手術を試みたもので、当然癒着が強く、剥離に難渋するものの19例中15例に腹腔鏡下手術が完遂できたというものである。常識的には開腹胃切除後に腹腔鏡下手術は無理と考えがちであるが、意外とうまくやれるということであり、もちろん技術的な問題から無理は禁物であろうが、「古い常識」に囚われず、新しいチャレンジを行う姿勢はおおいに評価したい。思えば、われわれの師である故陣内傳之助先生は独創的な発想で周囲を驚かせた。陣内先生といえば、とにかく拡大郭清を伴う根治手術で術後 QOL など無視されたように捉えられているが、決してそうではなく、根治手術を完遂したうえでの術後 QOL を常に考えておられた。安富教授から伺った話であるが、阪大時代には直腸癌根治術の際、当然、自律神経は合併切除を行うが、術後の機能を考え、神経移植や神経再生の研究を命ぜられたり、自分の意志で排便、排ガスの可能なストーマ造設を研究するよう命ぜられたりしたそうである。もちろんいずれも壮大なテーマで、40年以上を経過した現在もこれらの手法そのものが成功したわけではないが、根治性とのバランスのうえで直腸癌における自律神経温存手術や究極の肛門括約筋温存手術として、形を変えてその精神は見事に生かされている。

とかく、日々の臨床や手術に追われ、研究する時間が少なくなっているうえ、若手の外科離れで中堅、ベテラン層まで疲れきっている現状の消化器外科医。その疲弊ぶりは察して余りあるが、視点を変えれば、新しい研究テーマは意外と見つけられるものである。漫然とこれまでの手法を追従するのではなく、つねにチャレンジ精神とロマンを持ってより良い手術を、外科医療を追い求めていきたいものである。

(奥野清隆)